

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22653076

研究課題名（和文）アタッチメント理論と病児保育：その有機的架橋に向けた萌芽的研究

研究課題名（英文）Attachment theory and sick children day care : A preliminary study

研究代表者

遠藤 利彦 (ENDO TOSHIHIKO)

東京大学大学院・教育学研究科・准教授

研究者番号：90242106

研究成果の概要（和文）：本研究は、アタッチメント理論の立場から、探索的に、入院病児および通院病児に対する保育の現状と課題等を把握し、そのあり得べき形に関して考察を行ったものである。病院内保育施設における病児の観察や保育士に対する面接、通常保育所における保育士との理論研修および事例検討、幼少期における長期入院経験者を対象とした面接を通じて、殊に子どもの自発的探索活動を支える保育環境のあり方に課題があることが浮き彫りになった。

研究成果の概要（英文）：This study exploratorily examined current conditions and problems to be solved of sick children day-care in Japan in terms of attachment theory. From the observations of several hospitalized children and the interviews with their childcare workers, the joint sessions of case studies about some chronically sick children with the day-care workers, and the interviews with some adult women with the hospitalization experiences in childhood, especially the problems concerning the facilitation and restraint of children's exploratory behaviors were speculated to be most serious.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	0	1,000,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,400,000	420,000	2,820,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学（3902）

キーワード：アタッチメント 病児保育 保育所 病院内保育施設

1. 研究開始当初の背景

現在、全国病児保育協議会および日本小児科学会や医療保育学会などの地道な活動およびそれと連動した国や地方自治体の施策展開にもより、病児・病後児対応の保育所や院内病児保育所の数は確実に増加し、医療保育士などの常駐スタッフが病児の保育に専門的に関わり得る状況が徐々に広まりつつ

ある。しかしながら、筆者はこれまで既に複数の院内病児保育所と関わり、また医療保育系の学会や研究会主催による保育研修等にも携わってきたが、病児保育の内容は、少数の保育士に全面的に委ねられている場合が少なくはなく、それぞれの保育スタッフがまさに手探りでそれぞれの病児保育のあり方を模索しているというのが現状である。そう

した保育スタッフの尽力に対しては無論、最大限の敬意を表すべきであるが、実のところ、このことは裏を返せば、病児に特化した明確な保育理論や発達理論が未だ不在であり、そのことによる現場の混乱が相当に大きいことを物語っている。

確かに、例えば全国病児保育協議会から出版されている「改訂必携・新病児保育マニュアル」などは、病児保育に一定の指針を与え得るものではあるが、病児の心理的ケアや心の育ちに関する内容は相対的に稀薄であり、病気の種類や通院・入院期間あるいは通院・入院時の年齢や家族との分離などにおいてきわめて大きな差異を有する病児一人ひとりに対して、どのような保育を実践すべきかということについて具体的な示唆を与えるようなものではない。

特に、これまで筆者はアタッチメント理論に依拠しつつ親子の関係性に特別な関心を寄せてきたが、現今の病児保育は、子どもの発達の絶対的基盤たるアタッチメントの形成や維持に関して、理論に裏打ちされた十分な配慮や実践を行っているとは言いがたいものとして在る。実のところ、アタッチメント理論の視座から見た時に、病児は元来、それこそ病気やけがなどに伴う恐れや不安により最もその安全の感覚を揺るがされながら、通院・入院や特別な医学的措置により時に養育者等との分離を余儀なくされる（すなわち極度に高められたアタッチメント欲求が充足されないままになる）存在と言うことができ、そこに適切な介入やケアがなされないと、二次的に、様々な社会情緒的発達上の問題を抱え込む危険性にさらされていると考えることができる。

2. 研究の目的

上述したように、病児保育においては、と

りわけアタッチメント上の種々の問題に対して特別な配慮が必要であると言い得るが、現今のアタッチメント理論や先行研究の中に、保育スタッフが（殊に様々な特質や背景をもった複数の病児と同時に関わらざるを得ない状況で）病児の潜在的な心理的危機や発達上の課題に対していかに有効に対処することができるのか、その実践的な方途までも直接的に明示してくれるような知見を見出すことは困難である。そこで本研究は、病児保育現場の観察や担当保育士等に対する面接、および幼少期に病児保育を経験してきた成人からの聴取等を通じて、現在の病児保育の問題点や課題等を把握し、さらには保育士を対象としてアタッチメント理論およびそれに基づいた病児・病後児ケアのあり方等に関する実験的研修を試みることを通じて、アタッチメント理論をいかに病児保育に実践的に役立て得るのかについて考察を行うことを企図した。

3. 研究の方法 本研究は大別して三つの視座から探索的調査・実践を行った。

①病院内保育施設1カ所における6回の非積極的参与観察ならびに院内保育士3名、小児病棟担当の臨床心理士・相談員3名に対する面接調査（2010～2011年度）。

②病児および障害児の通園保育を手がける保育士を対象とするアタッチメント理論およびそれに基づいた病児ケア・保育に関する合同研修および各園から事例を持ち寄っての実践的検討。原則として月1回の実施とし、各回の参加者は10～20名であった（2011～2012年度）。

③小児性心疾患のため幼少時に長期入院を経験した現在20歳代の成人3名に対する面接調査（2012年度）。

4. 研究成果

①病院内保育施設における病児保育

当初の構想では、この病院内病児保育施設での保育実践のあり方および入院中の病児の生活全般に関するフィールド・ワーク実施を主要目的に掲げていたが、病児の病状や体調によって観察機会が大きく制約を受けること、またインフルエンザ等の流行時節には院外からの感染に最大限の注意を払う必要があることからなどから、病院との協議の上、結果的に限定された時間内、また院内保育スペース内のみでの、子どもの遊びを中心とした予備的観察を実施するに留まった。

種々の発達理論、殊に子どものアタッチメントに関して豊かな見識を有する保育士であったため、子どもの不安や恐れ等のネガティブな情動の表出に関しては、きわめて感受性豊かな対応を認めることができた。子どものその時々々の状態やニーズも的確に見極められており、玩具や絵本等の選択およびそれらを利した子どもとの相互作用に関しても概ね適切な関わり方を見て取ることができた。ただし、相対的に子どもの自発的な一人遊びや子ども同士の相互作用は観察時間全体を通して少なく、比較的、保育士主導型の関わりが多かったと言える。

ただし、こうした関わりについては、保育士自身が苦慮するところでもあることが面接から窺えた。病状や健康状態への配慮が最も優先されなければならない状況下において、アタッチメント理論で言うところの、自発的な探索活動をどれだけ促し、また制約すべきかについては単独では明確な方針が立てられず、本来であれば担当医師との意見交換が必須であるが、現状としてそうした機会を持つことが難しいということが吐露された。また、集団活動を組織的に展開したいが、子どもの病状や入院期間に広範なばらつき

がある中、保育の対象となる子どもの数や構成は日々流動的であり、結果、子ども同士が親密な仲間関係を形成することが困難であり、このことが病院内病児保育の最も大きな課題であるとの認識が示された。一方、小児病棟担当の臨床心理士・相談員からは、主に病院全体における子どもの心理面および発達に関する配慮の体制等について種々の情報を得たが、医師・看護師・その他のスタッフ個々それぞれのそうした側面への意識は相当に高いが、全体としての一貫性を図るような試みは不足しており、結果として、病院内における親とは別のアタッチメント対象、言い換えれば安全基地を確かに持ち得るに至る子どもは相対的に少数に留まるのではないかという見解が示された。

②通常保育所における病児保育

発達心理学、とりわけアタッチメント理論と保育との有機的な架橋に関心を有する保育士有志を募り、研究会を組織し、原則、月例で会合を重ねる中、病児や障害児に対する心理的ケアのあり方についても検討を行った。基本的に、前半は研究代表者が、アタッチメント理論および様々な発達理論に関して、それらと保育実践と結びつけるための説明を行った。当初、参加保育士には、アタッチメントを単に子どもに対する愛情や子どもとの親密なコミュニケーション等と誤解する向きも少なからず認められたが、徐々に正当な理解が形成されるに至ったと判断される。その上で、提示された病児の事例を合同で検討する時間を持った。

病児事例は、治療継続中の気管支系・循環器系・皮膚系・運動系等における慢性疾患および極度のアレルギー体質などが大半を占めた。定型発達の子どもの普通で遊ぶ中で、子どもの自発的な遊びの欲求や探索活動をいかにして適度なものに抑制し得るか、また

それに伴って生じるフラストレーション等にいかに対処すべきかといった課題が多く検討の対象とされた。

中には、顎顔面形態と聴覚等に先天的疾患を抱え、病院から定期的に保育所に保育を委託された乳児の事例もあり、特にその子が親の特殊な事情により、出生直後から病院での入院生活を余儀なくされるというケースであったため、とりわけアタッチメントへの配慮が必要と判断された。この事例の場合、いわゆる無差別的社交性のアタッチメント障害の特徴が顕著であり、その改善が急務と考えられた。保育所内では、特定の保育士が、情緒的利用可能性の原則に則り、物理的にも情緒的にも高度に一貫した関わりを持つ中で、徐々に、その特定保育士との間に緊密な情緒的絆が形成されていく様子を見て取ることができた。しかし、このケースでは、保育所での生活は1週間の内のごく限られた時間でしかなく、しかも、主たる生活の場である病院との連携が実質的に不可能であり、今後のトータル・ケアのあり方に大きな課題が残されたと言える。

③幼少時長期入院経験者が語る病児保育

先天性小児心疾患により幼少期から児童期を病棟で過ごし、現在、成人期に至っている研究協力者に対して面接調査を行った。病院内におけるスタッフとの関わりや養育者等とのアタッチメントのあり方には、疾病やその重篤度および病院の方針や構造等によって広範な差異があることが認められたが、幼少時の長期入院体験者には、概して、自身の今後の生活やライフコースに対する将来展望が希薄である特徴が認められ、殊に幼少期に心理的な自律性発達を支え促すという視座が病院および子どもの養育環境全体においてきわめて乏しい可能性が示唆された。生活が病気治療中心にならざるを得ず、遊び

が極端に制約されることはやむを得ないことと言えるが、その限られた可能性の中で、子どもの自発的探索をいかにして促し得るのか、その具体的な方策の案出が急務であると考えられた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計4件)

- ① 遠藤利彦 (2012). 発達心理学における発達障害論：環境の関与をいかに捉え得るか. 臨床心理学, 12, 345-347. 査読無.
- ② 遠藤利彦 (2010). アタッチメント理論の現在：生涯発達と臨床実践の視座からその行方を占う. 教育心理学年報, 49, 150-161. 査読有.

[学会発表] (計5件)

- ① 本郷一夫・近藤清美・遠藤利彦 (2013). 実践現場における発達心理学の役割. 日本発達心理学会第24回大会(明治学院大学).
- ② 溝川藍・子安増生・遠藤利彦 (2013). ころとコミュニケーションの発達：発達支援と教育実践の基礎. 日本発達心理学会第24回大会(明治学院大学).

[図書] (計4件)

- ① 小林隆児・遠藤利彦(編) (2012). 甘えとアタッチメント：理論と臨床. 遠見書房.
- ② 遠藤利彦 (2010). 心理臨床の基礎としての発達心理学. 坂本真士・伊藤絵美・杉山崇(編), 臨床に活かす基礎心理学(pp. 127-154). 東京大学出版会.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 利彦(ENDO TOSHIHIKO)

東京大学大学院・教育学研究科・准教授

研究者番号：90242106

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし